

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11624

研究課題名(和文) フィットネス教育を基盤とした小学校体づくり運動の学習プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a learning program for physical exercise in elementary school based on fitness education

研究代表者

佐々木 浩 (Sasaki, Hiroshi)

国土館大学・文学部・教授

研究者番号：20779574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生涯にわたって日常的な身体活動を自律的に継続できるフィットネス教育に着目して、「体づくり運動」の学習プログラムを開発することを目的としていた。51校624人の小学校教員を対象とした調査研究から、「体づくり運動」の「指導法」と「教材づくり」の意識は、教職経験を積んでも有意に改善しないことが明らかとなった。また、この傾向は他の領域には見られなかった。また、「リズム体操」の学習プログラムを開発し実践研究を行った結果、学習者から評価の高い成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

体づくり運動は、小学校から高等学校まで唯一全学年履修となっている領域であるとともに、直接体力向上をねらいとしている唯一の領域でもある。しかし、51校624人の小学校教員を対象とした本調査研究から、体づくり運動の「指導法」と「教材づくり」に関する意識は、教職経験を積んでも有意に改善しないことが明らかとなった。また、この傾向は他の領域には見られないことも明らかとなった。そこで、本研究で一定の成果を検証することができたフィットネス教育の理念を基盤とした「リズム体操」は、体づくり運動領域の定型教材として、有用な示唆を与えることができるといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a learning program for "physical exercise", focusing on fitness education that enables people to autonomously continue daily physical activities throughout their lives.

A survey study of 624 elementary school teachers in 51 schools revealed that the awareness of "teaching methods" and "making teaching materials" for "physical exercise" did not significantly improve even after accumulating teaching experience. In addition, this tendency was not seen in other areas. In addition, as a result of developing a learning program for "rhythmic gymnastics" and conducting practical research, we were able to obtain results that were highly evaluated by the learners.

研究分野：体育科教育

キーワード：体づくり運動 リズム体操

1. 研究開始当初の背景

近年児童生徒の体力合計点は、緩やかな向上傾向にはあるが、ピーク時であった昭和 60 年頃と比較すると依然低い状態にある。また、日常生活においても、携帯電話や携帯ゲーム、さらには車社会の影響や家事負担の減少などで、青少年の身体活動は質・量ともに衰弱する一途である。一方、今の子供たちが成人した頃の社会は、予測困難な厳しい挑戦の時代を迎えているといわれている。このような社会の変化は、これからの子供の体力や身体発達に対して果たす体育の役割を、新しい局面に向かわせようとしている。しかし、体力向上を直接のねらいとして設定されている「体づくり運動」領域では、これまで多様な実践や研究がなされているが、厳しい社会を生き抜くために必要な運動生活習慣の形成を目指した効果的な学習プログラムは多くを見ることができない。他方、アメリカでは、我が国より早く体力向上が課題とされ、生涯にわたって日常的な身体活動実践を自律的に継続することができるフィットネス教育の学習プログラムが、数多く開発された。そこで本研究では、アメリカのフィットネス教育の理念を基盤とし、生涯にわたって日常的な身体活動を継続するための資質・能力を育成するための、体づくり運動の学習プログラムを開発することにした。

一方、平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、運動領域と保健領域の一層の関連を図ることが示された。また、平成 29 年告示の学習指導要領では、「体づくり運動」領域内の「体力を高める運動」が「体の動きを高める運動」と変更され、体力の向上を体の基本的な動きを高めることと捉えることができるようになった。さらに、学んだことを授業以外でも生かすことができるようにと強調された。この改訂は、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することをねらいとしており、アメリカのフィットネス教育の理念に近いと考えられる。しかし、これらのエビデンスは未だ少なく、本研究の遂行によりそれらを実証し、今後体育を専門としている教師が少ない小学校現場に大いに貢献できるのではないかと考えた。

元来「体づくり運動」は「体操」という領域名称であった。ところが、平成 10 年の学習指導要領の改訂で、「体づくり運動」と名称が変更され、新しく「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」の 2 つの内容で構成されるようになった。さらに、平成 20 年及び 29 年の改訂でも、領域内の学習内容の名称が変更された。したがって、新しい「体づくり運動」の指導イメージの構築はこれからの課題であり、今後効果的な学習プログラムのエビデンスが必要とされる。くわえて、今後は更なる高齢化が進み、尚且つ予測不可能な変化が著しい社会が到来する。その社会を力強く、そしてより良い人生を生き抜く子どもたちを育成するためには、学んだことを生かし、生涯にわたって日常的な身体活動実践を自律的に継続することができる資質・能力を身に付けさせることが肝要である。したがって、そのための学習プログラムの開発には大いに意義があるのではないかと考えられた。

2. 研究の目的

上記背景を踏まえ、本研究では、アメリカのフィットネス教育の理念を基盤とし、子供たちに学んだことを生かし、生涯にわたって日常的な身体活動実践を自律的に継続することができる資質・能力を育成する体づくり運動の学習プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

調査研究としては、小学校教員を対象として、まず、体づくり運動系を含む各運動領域に関して授業づくりの計画と実践に当たる「教材作成」と「指導法」に焦点を当てて実態調査を行い、それらを相対的に比較検討することにより体づくり運動系の現状を浮き彫りにする。次に、体づくり運動領域の指導法に関して、小学校教員を対象として、領域内の各運動内容では、意識の違いが生じるのかを比較検討する。

実践研究としては、音楽に合わせて楽しく体を動かすことにより体力を高めることができるリズム体操に着目し、高学年対象の単独単元としての指導計画を作成し、子どもたちが主体的に学ぶことのできる定型教材としての可能性を検討する。

4. 研究成果

(1) 他の運動領域と比較した体づくり運動系の現状について (調査研究)

回答を得た 624 名の小学校教員のうち、1~9 年目までを「若手教員」、10 年以上を「中堅・ベテラン教員」として区分した。この教員歴別に分類すると、1 年目から 9 年目が 346 人、10 年目以上が 278 人であった。

「教材作成」について (表 1)

すべての領域において、若手教員 (10 年未満) より中堅・ベテラン教員 (10 年以上) の方が「3 どちらかというところづくりやすい」と「4 つくりやすい」(3+4) の割合が高くなり、「1 つくりにくい」と「2 どちらかというところづくりにくい」(1+2) の割合が低くなった。しかし、 χ^2 検定の結果、その割合に関しては、体づくり運動系と器械運動系を除く他の領域は全て有意差を確

認できたが、体づくり運動系と器械運動系は有意差を確認することはできなかった。この点に関しては、器械運動系では、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）の双方が、「3 どちらかというところやすい」と「4 つくりやすい」(3+4)の割合で70%を超える高い値を示しているとともに、その差が5ポイントと他の領域より少なく、高止まりの傾向が見られるため有意差が生じなかったものと考えられる。他方、体づくり運動系では、「3 どちらかというところやすい」と「4 つくりやすい」(3+4)の割合は、表現運動系、水泳運動系に次いで3番目に低く、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）の差も、7.4ポイントと器械運動に次いで少ない結果であった。そのため有意差が生じなかったものと考えられる。しかし、体づくり運動系より「3 どちらかというところやすい」と「4 つくりやすい」(3+4)の割合が低かった表現運動系と水泳運動系では、若手と中堅・ベテラン教員との割合に有意な差が認められた。そのことから、この2領域は、体づくり運動系とは違い教職経験を積んでいくことによって、教材作成に関する意識の高まりが期待できるものと考えられる。

以上の点より、体づくり運動系は、全体としても、決して教材をつくりやすい領域ではない中、その意識は、教職経験を積むことによっても高まることが期待しづらいと考えることができる。このことから、体づくり運動系に関しては、教職経験の長短に関わらず、「教材作成」に関して何らかの支援をする必要性があることが示唆された。

「指導法」について(表2)

すべての領域において、若手教員（10年未満）より中堅・ベテラン教員（10年以上）の方が、「3 どちらかというところ指導しやすい」と「4 指導しやすい」(3+4)の割合が高くなり、「1 指導しにくい」と「2 どちらかというところ指導しにくい」(1+2)の割合が低くなった。しかし、 χ^2 検定の結果、その割合に関しては、体づくり運動系を除く他の領域は全て有意差を確認できたが、体づくり運動系に限っては有意差を確認することはできなかった。

この点に関して、体づくり運動系は、「3 どちらかというところ指導しやすい」と「4 指導しやすい」(3+4)の割合が、表現運動系、水泳運動系に次いで3番目に低い値を示しているが、若手教員（10年未満）と中堅・ベテラン教員（10年以上）との割合の差は6.8ポイントと全領域の中で一番小さかった。そのため、有意差が生じなかったものと考えられる。

しかし、体づくり運動系より「3 どちらかというところ指導しやすい」と「4 指導しやすい」(3+4)の割合が低かった表現運動系と水泳運動系に関しては、若手と中堅・ベテラン教員との割合に有意差が認められているため、教職経験を積んでいくことによって、指導法に関する意識の高まりが期待できるものと考えられる。

以上の点より、体づくり運動系は、決して指導しやすい領域とは言えない中、他の領域とは異なり、教職経験を積むことによっても、指導法に関する意識が向上するということを期待することは難しいと考えることができる。これらのことから、体づくり運動系は、「教材作成」同様「指導法」に関して、教職経験の長短に関わらず、教員に対し何らかの支援をする必要性があることが示唆された。

表1 教材作成について(4件法)

領域	経験	1+2	3+4	合計	χ^2	p
体づくり運動系	10年未満	154 45.4%	185 54.6%	339	3.470	0.062
	10年以上	104 38.0%	170 62.0%	274		
	合計	258 42.1%	355 57.9%	613		
器械運動系	10年未満	89 26.2%	251 73.8%	340	2.090	0.148
	10年以上	58 21.2%	216 78.8%	274		
	合計	147 23.9%	467 76.1%	614		
陸上運動系	10年未満	126 37.2%	213 62.8%	339	9.151	0.002 **
	10年以上	71 25.7%	205 74.3%	276		
	合計	197 32.0%	418 68.0%	615		
水泳運動系	10年未満	189 55.6%	151 44.4%	340	6.927	0.008 **
	10年以上	124 44.9%	152 55.1%	276		
	合計	313 50.8%	303 49.2%	616		
ボール運動系	10年未満	77 22.8%	260 77.2%	337	7.630	0.006 **
	10年以上	39 14.1%	238 85.9%	277		
	合計	116 18.9%	498 81.1%	614		
表現運動系	10年未満	214 63.3%	124 36.7%	338	5.114	0.023 *
	10年以上	151 54.3%	127 45.7%	278		
	合計	365 59.3%	251 40.7%	616		

* $p < .05$, ** $p < .01$

表2 指導法について(4件法)

領域	経験	1+2	3+4	合計	χ^2	p
体づくり運動系	10年未満	120 34.7%	226 65.3%	346	3.265	0.071
	10年以上	77 27.9%	199 72.1%	276		
	合計	197 31.7%	425 68.3%	622		
器械運動系	10年未満	104 30.1%	241 69.9%	345	7.786	0.005 **
	10年以上	56 20.3%	220 79.7%	276		
	合計	160 25.8%	461 74.2%	621		
陸上運動系	10年未満	89 25.9%	255 74.1%	344	4.687	0.030 *
	10年以上	51 18.5%	224 81.5%	275		
	合計	140 22.6%	479 77.4%	619		
水泳運動系	10年未満	137 39.7%	208 60.3%	345	7.060	0.008 **
	10年以上	81 29.5%	194 70.5%	275		
	合計	218 35.2%	402 64.8%	620		
ボール運動系	10年未満	78 22.6%	267 77.4%	345	14.414	0.000 ***
	10年以上	30 10.9%	244 89.1%	274		
	合計	108 17.4%	511 82.6%	619		
表現運動系	10年未満	205 59.4%	140 40.6%	345	5.307	0.021 *
	10年以上	139 50.2%	138 49.8%	277		
	合計	344 55.3%	278 44.7%	622		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「教材作成」と「指導法」の比較について(表3,表4)

調査「教材作成」についてと、調査「指導法」についての各領域の割合をクロス集計した。結果に関しては、²検定を行った(表3)。その結果、体づくり運動系と陸上運動系、水泳運動系の3領域がその割合に有意差が認められた。

さらに、有意差が認められた「体づくり運動系」、「陸上運動系」、「水泳運動系」の3領域に関しては、教職経験区分ごとにクロス集計を試みた(表4)。その結果、3領域全て若手教員(10年未満)、中堅・ベテラン教員(10年以上)どちらの教員区分とも、「指導法」よりも「教材作成」の「1+2」(つくりにくい+どちらかというところ)の割合の方が高い結果となった。また、これも²検定の結果、全ての割合において、有意な関係があることが認められた。

これらの結果から、体づくり運動系は、陸上運動系や水泳運動系とともに、教員は指導法より教材作成に関して難しさを抱いていることが推察できた。また、有意差の確認できた、体づくり運動系を含む3領域とも、若手教員(10年未満)、中堅・ベテラン教員(10年以上)といった教職経験の区分に限らず、教職経験を積んでも指導法より教材作成に関して難しさを抱いていることが推察できた。

表4 体づくり運動系、陸上運動系、水泳運動系における教職経験区分による教材作成と指導法との関係

表3 教材作成と指導法との関係

領域		1+2	3+4	合計	χ^2	p
体づくり運動系	教材	258 42.1%	355 57.9%	613	14.395	0.000 ***
	指導	197 31.7%	425 68.3%	622		
	合計	455 36.8%	780 63.2%	1235		
器械運動系	教材	147 23.9%	467 76.1%	614	0.550	0.458
	指導	160 25.8%	461 74.2%	621		
	合計	307 24.9%	928 75.1%	1235		
陸上運動系	教材	197 32.0%	418 68.0%	615	13.776	0.000 ***
	指導	140 22.6%	479 77.4%	619		
	合計	337 27.3%	897 72.7%	1234		
水泳運動系	教材	313 50.8%	303 49.2%	616	30.776	0.000 ***
	指導	218 35.2%	402 64.8%	620		
	合計	531 43.0%	705 57.0%	1236		
ボール系運動	教材	116 18.9%	498 81.1%	614	0.443	0.511
	指導	108 17.4%	511 82.6%	619		
	合計	224 18.2%	1009 81.8%	1233		
表現運動系	教材	365 59.3%	251 40.7%	616	1.971	0.160
	指導	344 55.3%	278 44.7%	622		
	合計	709 57.3%	529 42.7%	1238		

*** $p < .001$

領域	経験区分	1+2	3+4	合計	χ^2	p
体づくり運動系	教材	154 45.4%	185 54.6%	339	8.238	0.004 **
	指導	120 34.7%	226 65.3%	346		
	合計	274 40.0%	411 60.0%	685		
10年以上	教材	104 38.0%	170 62.0%	274	6.300	0.012 *
	指導	77 27.9%	199 72.1%	276		
	合計	181 32.9%	369 67.1%	550		
陸上運動系	教材	126 37.2%	213 62.8%	339	10.101	0.001 **
	指導	89 25.9%	255 74.1%	344		
	合計	215 31.5%	468 68.5%	683		
10年以上	教材	71 25.7%	205 74.3%	276	4.118	0.042 *
	指導	51 18.5%	224 81.5%	275		
	合計	122 22.1%	429 77.9%	551		
水泳運動系	教材	189 55.6%	151 44.4%	340	17.309	0.000 ***
	指導	137 39.7%	208 60.3%	345		
	合計	326 47.6%	359 52.4%	685		
10年以上	教材	124 44.9%	152 55.1%	276	14.116	0.000 ***
	指導	81 29.5%	194 70.5%	275		
	合計	205 37.2%	346 62.8%	551		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(2) 小学校高学年におけるリズム体操に関する研究について(実践研究)(表5)

調査研究の結果から、小学校教員は、体づくり運動系に関して、指導法より教材作成に難しさを抱いていることが明らかになった。そして、そのことは、若手教員(10年未満)、中堅・ベテラン教員(10年以上)といった教職経験の区分に差が見られず、教職経験を積んでも教材の作りやすさの改善割合が有意に働かないことも明らかになった。このことから、小学校教員は、体づくり運動領域の授業づくりに関して、経験値にかかわらず課題を抱えていることが分かった。そこで、これら調査研究を基に、音楽に合わせて楽しく体を動かすことにより体力を高めることができフィットネス教育の理念にかなうリズム体操に着目し、高学年対象の単独単元としての指導計画を作成し、子どもたちが主体的に学ぶことのできる定型教材としての可能性を検討すべく実践研究を行った。

「形成的授業評価」(表6)から

総合評価得点は、2時間目から向上し、最終的には2.88の5段階診断基準の「5」となり、児童は総合的に高い評価を下していることから、一定の学習成果を保障することができたといえる。

さらに各因子別に単元過程の推移を確認してみると、特に「協力」因子においてその得点に顕著な向上が見られた。単元1時間目こそ、評価得点は2.31(単元中、全時間の全因子で最も低い得点)であったが、学習を重ねていくにつれて児童の評価は高まり、最終5時間目には2.95となり全時間の全因子の中でも最も高い評価を得ることとなった。このことから、リズム体操を創り上げていく過程での児童のグループ活動の協力的な学びが、肯定的に構築されていったも

のと推察することができる。

また、「成果」因子に着目すると、1時間目の評価得点は2.39（評価3）であるが、学習を重ねていくにつれて向上し、最終5時間目には2.77となり、5段階診断基準の「5」を記録した。「成果」因子は、児童の「できた」「わかった」といったいわば体育の陶治的な目標に対する実現度を図ることができる。したがって、この因子の評価得点の伸びは、児童の授業に対する感動の大きさの向上を裏付けることができる。

「学び方」因子は、オリエンテーション後の2時間目の学習から高い得点を維持し、単元を終了した結果となった。この因子は、学習の自発性や合理性を問うものであり、自分から進んでめあてに向かって取り組む姿勢を評価することができる。したがって、この得点の推移から本単元のリズム体操の教材は、課題解決的な学習として児童に評価されたと推察することができる。

「意欲・関心」因子は、オリエンテーションの単元最初から2.86といった高い評価得点となり、単元終了まで高得点のまま推移した。この因子は、児童の運動欲求の充足度を評価するものであり、体育授業が楽しかったかどうかのパロメーターとなるものである⁽¹⁾。したがってこの結果から、本単元リズム体操の授業は、児童にとって楽しく精一杯全力で運動することのできる教材であることがいえる。

以上のことから、本研究で実践したリズム体操は、児童に高い関心をもって取り組ませることができ、一定の学習成果を保障することができたといえる。さらに、対象学級児童の単元終了後の自由記述感想文でも、殆どの児童に「楽しい」「面白い」の記述が見られたことから、子供たちは、友達と動きを合わせることや音楽に合わせることなど、ともにリズム体操を創り上げることの楽しさを学び取っていたことが確認できた。また、汗をかきながら動きの高まりを感じ取ることができたという記述も散見されることから、体づくり運動のねらいにせまることができたことも分かった。したがって、本研究の知見は、今後の小学校現場の体づくり運動の授業づくりについて、一つの示唆を与えることができたのではないかと考えられる。

表5 単元計画

時間	1	2	3,4	5
ねらい	学習の流れと初めの易しい動きを知ろう	一人一つの動きをつくり、グループ全員で合わせよう	グループ後ことに一連の体操を工夫し、よりよい動きに高めよう	創り上げた体操を発表しよう
指導の内容	・グルーピング ・学習方法	・動きの選択及び創作 ・動きのポイント	・演技構成 ・動きのポイント ・協力体制	・動きの確認 ・発表会
学習過程	1 集合・整列・挨拶・健康観察 2 準備運動 3 めあての確認			
	4 オリエンテーション	4 基本学習	4 発展学習	4 まとめ
	・学習のねらいと進め方を知り、単元の見直しを持つ。 ・グルーピングを仕上げのやさしい動きと方法を知る。 ・学習カードの使い方を知る。	・音楽や基本の動きを手がかりに一人一つの動きを考える。 ・グループで合わせる。 ・ペアグループで見合う。	・動きや隊形等を工夫し動きを高める。 ・一連の体操を音楽に合わせて滑らかに連続できるよう動きを高める。 ・ペアグループで見合い高め合う。	・グループ毎に成果を確かめる。 ・リズム体操の発表をする。 ・体力の伸びを評価し、単元のまとめをする。 ・今後の生活に生かすようにする。
	5 整理運動 6 振り返り 7 挨拶			
知・技	①観察・学習カード	②観察・学習カード	/②観察学習カード	②観察・学習カード
評価計画			①観察・学習カード/②観察・学習カード	
態	①観察・学習カード		②観察・学習カード/	③観察・学習カード

表6 単元過程の形成的授業評価得点

	成果	評価	意欲・関心	評価	学び方	評価	協力	評価	総合評価	評価
1時間目	2.39	3	2.86	4	2.52	3	2.31	2	2.51	3
2時間目	2.57	4	2.93	4	2.90	5	2.88	5	2.79	5
3時間目	2.56	4	2.97	4	2.71	4	2.88	5	2.75	4
4時間目	2.64	4	2.91	4	2.78	4	2.87	5	2.78	5
5時間目	2.77	5	2.93	4	2.92	5	2.95	5	2.88	5

<文献>

- (1) 高橋健夫編著(2003). 体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント . 明和出版：東京 . pp.8-15.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐々木 浩・細越 淳二・須甲 理生	4. 巻 24
2. 論文標題 小学校体育科における他の運動領域と比較した体づくり運動系の現状について-計画と実践に当たる教材作成と指導法に焦点を当てて-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育授業研究	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 浩	4. 巻 23
2. 論文標題 小学校高学年におけるリズム体操に関する実践的研究 体づくり運動領域の定型教材としての可能性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 浩・中島 里彩・新藤 駿斗・三浦 杏優・大塚 未来・石毛 勇志・藤元 暉星	4. 巻 24
2. 論文標題 Gボールを使ったリズム体操に関する事例的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木 浩	4. 巻 55
2. 論文標題 小学校体育科における体づくり運動に関する調査研究 - 領域内の各運動に関する意識調査を通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国土館人文学	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細越 淳二	4. 巻 70
2. 論文標題 優れた体育授業を観る・創る	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 5-8,68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須甲 理生	4. 巻 13
2. 論文標題 ICTの活用で対話時間の確保と戦術的課題の解決を	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 T-Navi Edu	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須甲 理生	4. 巻 32
2. 論文標題 新学習指導要領を実現，主体的・対話的で深い学びの体育授業づくり：ジグソー方を適用した体づくり運動（体の動きを高める運動）の授業づくり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 楽しい体育の授業	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐々木 浩
2. 発表標題 戦後小学校体育科における「体づくり運動」の学習指導論の変遷
3. 学会等名 日本体操学会学校体育分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木 浩・細越 淳二・須甲 理生
2. 発表標題 小学校体育科における他の運動領域と比較した体づくり運動系の現状について-計画と実践に当たる教材作成と指導法に焦点を当てて-
3. 学会等名 第25回 体育授業研究会東京冬大会 Winter Webinar2
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 土村茉央・大川望・平林涼・宮原真理・大貫巧喜・古川茉由・渡邊悠莉・山田翔真・佐々木浩
2. 発表標題 Gボール体操教材発表
3. 学会等名 第20回全国ちゃれんGボール大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木 浩
2. 発表標題 戦後小学校体育科における「体づくり運動」の学習指導論の変遷
3. 学会等名 日本体操学会学校体育分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木浩・細越淳二・須甲理生
2. 発表標題 小学校体育における体づくり運動の現状と課題
3. 学会等名 日本体育科教育学会第25回大会WEB大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木 浩・中島 里彩・新藤 駿斗・三浦 杏優・大塚 未来・石毛 勇志・藤元 暉星
2. 発表標題 Gボール体操教材発表2
3. 学会等名 第21回全国ちゃれんGボール大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 清水諭・高橋義雄・下竹亮志・木原慎介・笠野英弘・佐々木浩ほか25名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 現代社会におけるスポーツと体育のプロモーション	

〔産業財産権〕

〔その他〕

池田延行・細越淳二・佐々木浩・須甲理生ほか：スポーツ庁委託事業「新型コロナウイルス感染症に配慮した学習活動の工夫例（全54映像コンテンツ）2021.3

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	細越 淳二 (HOSOGOE Junji) (70365526)	国土館大学・文学部・教授 (32616)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須甲 理生 (SUKOU Riki) (70614478)	日本女子体育大学・体育学部・准教授 (32671)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関